

田村 早苗 santamura@gmail.com

北星学園大学

要旨

本発表では、現代日本語の接続表現タメニに助詞のハが後接した場合の用法の分布について、タメニとハそれぞれの意味論に基づいて説明できると論じる。タメニとタメニハには、用法の分布に明確な違いがある。第1に、タメニハには目的用法と原因用法があるが、ハが後接したタメニハという形は原因用法をもたない。目的用法についても、一回的な現実の事態について主節で述べることができず、必然性・願望や、現実の複数回の事態に言及する例でないと容認されない。本発表は、このような用法の特徴を意味論に基づき説明する。まず、目的用法のタメニについては、主体・時間・可能世界ごとに「目的」の内容が変わりうることに注目し、世界・個体・時間に相対化された命題の概念を用いて意味を定義することを提案する。いっぽう、ハについては条件文と同様の働きを持つと仮定し、後件の assertion の対象となる文脈集合を、前件が制限するという意味論を持つものと分析する。

1. はじめに

本発表では、日本語のタメニを用いた従属節（以下、「タメニ節」と呼ぶ）について、助詞ハが後接された場合と後接されない場合の用法・意味の分布に注目する。

一般的にタメニ節には、従属節で述べられている事態の実現を目的としたうえでの行為や義務などについて述べる(1)のような用法と、従属節で述べられている事態が原因・理由となって主節の事態が発生することを述べる(2)のような用法が認められる。以降の議論のため、2つの用法をそれぞれ目的用法、原因用法と呼ぶ。

- ✓ ニが後接しない「タメ」を用いたタメ節にも同様に〈目的〉と〈原因〉の2用法が認められる。ただし、例文によっては一方が他方よりもより自然であると判断される場合も多い。タメとタメニの意味・用法や構造の違いについては、本発表では議論の対象外とする。

- | | | | |
|-----|----|---|------|
| (1) | a. | 来年留学する <u>ために</u> 、アルバイトをしてお金をためなければならない。 | 〈目的〉 |
| | b. | チケットを購入する <u>ために</u> 、窓口に並んだ。 | 〈目的〉 |
| (2) | a. | 来年留学する <u>ために</u> 、A先生の授業に出席できなくなってしまった。 | 〈原因〉 |
| | b. | 強風が吹いた <u>ために</u> 、庭の木が何本も折れた。 | 〈原因〉 |

しかし、助詞ハを後接したタメニハは用法の範囲が異なることが指摘されている（塩入 1992, 1995）。第1の相違点として、タメニハには目的用法はあるが原因用法はない。

- | | | |
|-----|---|------|
| (3) | 来年留学する <u>ためには</u> 、アルバイトをしてお金をためなければならない。 | 〈目的〉 |
| (4) | * 来年留学する <u>ためには</u> 、A先生の授業に出席できなくなってしまった。 | 〈原因〉 |

第2の相違点は、目的用法に関するものである。目的用法の範囲において、タメニは自然に使用可能だが、タメニハに置き換えると容認度が下がる例が多く見られる。

- (5) 両親に会う {ために／*ためには}、3日間の休暇を取った。 〈目的〉
(塩入 1992: p.59, 容認度は原文より)

つまり、目的用法のタメニハはタメニよりも制限が強いと言える。

本発表では、このようなタメニハの用法の特徴について、タメニと助詞ハのそれぞれの意味から構成的に意味を計算することによって説明できると論じる。分析の鍵になるのは以下の2点である。

- (6) a. 目的のタメニの意味論に行為者の視点という概念を組み込む。
b. 助詞ハは、条件文と同様に assertion の対象となる context を制限するものとみなす。

■ 議論の流れ

- 2節：先行研究の検討と説明すべき問題点の整理
- 3節：タメニとハの意味論の提案
- 4節：提案した意味論に基づくタメニハの用法制限の説明
- 5節：まとめと関連する現象

2. 先行研究：「複数性」の要求

2.1. 塩入(1992, 1995)の指摘

ここでは先行研究として塩入(1992, 1995)を取り上げ、それをふまえて説明すべき問題点を整理する。塩入(同)は、タメニとタメニハの用法や節階層、節の独立性などの違いについて論じている。それによると、タメニハはタメニと比較して節の独立度が高く、また、主節には「一回の動作の実現文を用いることができない」(塩入 1992: 60)と指摘している。本発表では後者の、一回性の動作に対する制限に注目する。関連する塩入の議論を以下にまとめる。

- ✓ 塩入(1992)はタメニハ以外の従属節(カラニハ、以上ハ、トキニハなど)についても議論を行い、タメニハと同様に、ハが後接する場合には節の独立度が高く、一回の出来事を描写しにくいと指摘している。本発表ではタメニハ以外の従属節については議論しない。

塩入(1992, 1995)は、目的用法のタメニ節に助詞ハが付与可能になる条件を大きく2つに分けている。1つは、(A)必要性や願望、意図などのポテンシャルな事態を述べる場合である。それに加えて、主節が現実に実現している事態を述べる場合には、「複数の動作の実現を意味する」(塩入 1992: 63)ことが必要と述べている。この条件を満たさない場合には(5')のように容認度が下がる。いっぽう、この条件を満たす場合として塩入(1992)が挙げているのが、主節が(B)とりたて詞を用いる、(C)行為の列挙、(D)多数の行為を含意する内容、(E)疑問詞を含む疑問文である。以下に例を挙げる。

- (5') *両親に会うためには、3日間の休暇を取った。 (塩入 1992: p.59 に基づく、一回的事態)
(7) 新鮮な食べ物を手に入れるためには、市場へ行く必要がある。 (塩入 1992: p.59, 必要性)

- (8) 両親に会うためには、3 日間の休暇まで取った。 (塩入 1992: p.59, とりたて)
- (9) 両親に会うためには、休暇を取ったり、列車の手配をしたりした。 (塩入 1992: p.59, 列挙)
- (10) 両親に会うためには、ずいぶん苦労した。 (塩入 1992: p.59, 多数の行為を含意)
- (11) 事態が良い方向に向かうためには、どうすればいいのだろうか。 (塩入 1995: p.465, 疑問文)

ただし、塩入が挙げる(E)疑問文の場合については、本稿では議論の対象としない。挙げられている例文が「どうすればいい」のようにモダリティ要素になっており、モダリティ要素を含まない疑問文にした場合にはエコー疑問文のような印象になるためである。

- (12) 定期を買うためには、どこに電話 {?しましたか/(?)したんですか}。

2.2. 説明すべき問題点

塩入(同)の指摘は、現象の記述として非常に興味深いものである。いっぽうで、(A)のようなポテンシャルな事態について述べる場合や、(B)-(D)のような実現した複数性事態という概念でまとめられている場合を見ると、性質の異なるものが混在している印象を受ける。以上をふまえて、本発表で扱う問題は以下の 3 点にまとめられる。

説明すべき点

- (13) a. 助詞ハの付与がどのように「複数性」の要求をもたらすのか。
 b. 上記(A)-(D)の条件の共通点と相違点をどのようにして捉えることが出来るか。
 c. タメニハが原因用法をもたないのはなぜか。

次節以降では、タメニと助詞ハそれぞれの意味論からタメニハの意味を計算することで(13a)-(13c)に対して説明を与える。まず、次節ではタメニとハの意味論を提案する。

3. 目的のタメニとハの意味論

3.1. 目的のタメニと行為主体の視点

まず初めに、目的を表すタメニの意味論について本発表の分析を提示する。目的というものの特徴のひとつは、それが目的を持つ視点に相対的であることである。まず第 1 に、主体が異なれば目的は異なる。さらに、同一の主体でも時間が異なれば別々の目的を持ちうるし、同じ時間の同じ主体でも、仮想の状況のもとでは異なる目的を持っていると想定することは可能である。このような考察に基づいて、タメニの意味論を世界 w , 個体 j , 時間 t について相対的なものと考え、以下のように定義する。

- (14) 「P-タメニ」が $\langle w, j, t \rangle$ において真
 iff w において P の行為者 $\langle j, t \rangle$ が、P という goal をもっている。
 ✓ ただし、 w は世界、 j は個体、 t は時間の変項
 ✓ P は「行為 action」という意味タイプである

「ある視点 x が P という goal をもつ」とは、本発表では、「 x が、自身が行為者となる未実現の行為 P について、「P が実現する」を真にするという制限のもとで行為を行うこと」と捉える。

3.2. 条件関係を述べるものとしてのハ

次に、助詞ハの意味論について本発表の提案を示す。本発表の分析は、主題のハを条件文と並行的に捉える Hara (2018) の提案に基づいたものである。

前提となる枠組みとして、Stalnaker (1978)による文脈概念に基づく動的可能世界意味論(Heim 1982)を紹介する。この枠組みでは、文の意味は発話前の文脈から発話後の文脈への更新を引き起こすもの(context change potential: ccp)として捉えられる。「文脈」は文脈集合、すなわちその文脈で真となる世界の集合と定義される。Assertion の場合、ccp の典型的な定義は次のようになる。

$$(15) \quad c + \varphi =_{\text{def}} \{w \in c \mid \llbracket \varphi \rrbracket^{w,c} = 1\}$$

しかし、条件文の場合には文脈の更新は複数の段階を経て行われる。「If P then Q.」という条件文であれば、まず文脈集合が P で更新され、 $c \cap P$ という仮定的な文脈が作られる。そのうえで、文脈 $c + P$ に対して Q による更新が行われる。その結果に基づいて、元の文脈 c について情報の更新が行われる。最も単純な条件文の分析では、文脈集合 $c \cap P$ に含まれる世界すべてについて Q が真である（つまり、 $c \cap P$ と $c \cap P \cap Q$ が同一の集合である）なら元の文脈 c において条件文が真、そうでなければ偽となる。

この枠組みでは、条件文の前件 P は、後件の assertion が更新する対象となる文脈を、P が成り立つものに制限する働きを持つ。本発表では、日本語の助詞ハも条件文と同様の働きを持つと想定する(Hara 2018)。

$$(16) \quad \text{「P-ハ Q」: Q という assertion の対象となる会話の文脈を、P の命題を満たすものに制限する。}$$

3.3. 視点概念を用いた命題の再定義

ただし、ccp の枠組みを 3.1 節で述べたタメニの分析と組み合わせるには、「命題」および「文脈集合」の概念に修正を加える必要がある。前節では「P タメニ」について、世界 w, 個体 j, 時間 t に相対的に真偽が決まるような意味論を与えた。これと整合的にするには、「命題」を世界から真理値への関数（世界の集合によっても捉えられる）ではなく、世界・個体・時間をとって真理値を与える関数としなければならない。本発表では、ある命題を、その命題を真にする世界・個体・時間の順序対の集合として捉えることにする。このような命題の定義は、centered proposition (Lewis 1979, Cf. Stephenson 2007, Lasersohn 2009, 2013, 田村 2012, 2013)の概念に基づくものである。これに従って、文脈集合も同様の順序対の集合と定義する。結果として、ccp は一般的に次のように表されることになる。

$$(17) \quad c + \varphi =_{\text{def}} \{ \langle w, j, t \rangle \in c \mid \llbracket \varphi \rrbracket^{w,j,t,c} = 1 \}$$

4. 複数性とタメニ + ハ

本節では、第 3 節で提示した枠組みに基づいて、(13a-c)で述べた問題点について説明を与える。まず、4.1 節と 4.2 節において、タメニハの使用が可能になる例について検討する。次に 4.3 では、目的用

法でタメニハが容認できない例について説明を与える。さらに 4.4 で、タメニハが原因用法をもたないことについて説明する。

4.1. モダリティと視点の世界の複数性

上述の意味論に基づいて、タメニハが容認される例を分析する。まず、必然性や意図、願望などのモダリティを含む例について分析する。

- (7) 新鮮な食べ物を手に入れるためには、市場へ行く必要がある。

このような priority modality (Portner 2009) が用いられる文脈では、議論の対象とされているのは現実世界に限らない。つまり、「P タメニハ Q」が発話される以前の文脈集合に含まれる順序対 $\langle w, j, t \rangle$ について、世界 w の部分は様々な可能世界でありうる。このような可能世界を含めた行為者を想定したうえで、「P-タメニハ」によって「P という goal をもつ視点」が Q という assertion の対象として取り出される。結果として、「P タメニハ Q」は可能世界も含めた様相表現として解釈される。priority modality が関わる場合にタメニハが使用可能なのは、このような意味計算が適切に行われるためと説明できる。

4.2. 列挙・とりたてと視点の時間の複数性

一方で、行為の列挙(8)やとりたて詞(9)が関わる場合、および複数の行為が含意される場合(10)については、別の説明が必要になる。このような文が発話された場合、現実世界について述べていることが明らかであり、文脈集合に含まれる視点は現実世界のものであるという前提が置かれていると考えられる。

- (8) 両親に会うためには、3 日間の休暇まで取った。
(9) 両親に会うためには、休暇を取ったり、列車の手配をしたりした。
(10) 両親に会うためには、ずいぶん苦労した。

この場合には「P タメニハ」の P は文脈集合をどのように制限すると考えることができるだろうか。ここで、視点に含まれる「時間」の要素が働いていると発表者は主張する。行為者のもつ goal は時間によって変化するため、同じ主体でも時間ごとに視点として区別されると考えるのは妥当であろう (Cf. 田村 2012, 2013)。(8)-(10)のように現実世界の複数行為を述べる例でタメニハが容認可能なのは、「P-タメニハ」によって、文脈集合の中の「P という goal をもつ様々な時点での視点」が assertion の対象として取り出されるためと分析できる。

前節と本節の分析によって、「タメニハが使用可能な例の共通点と相違点をどうとらえるのか」という (13b) の疑問点に対して説明を与えた。すなわち、タメニハが使用可能な例では、文脈集合を「P という goal を持つか」によって分け、P という goal を持つ視点の集合に対して Q という assertion が行われるという共通点がある。いっぽう、必然性などのモダリティが関わる場合と、現実世界の複数の事態が関わる場合では、視点の中の世界の要素について、現実世界以外も含まれるか、現実世界だけに限られるかという違いがある。

4.3. 目的用法：一回的事態を述べることへの制限

次に、タメニハが使用できない場合について分析する。まず本節では、目的用法のタメニハが持つ、

一回的事態を述べることへの制限について論じる(→上記の問題点(13a))。

これについては、タメニ+ハによる文脈集合に対する制限が実効性を持つかという点から説明できる。現実世界の一回的な事態に関わる目的について述べている場合、文脈上考慮されている行為者の視点は現実世界の、特定の個体、特定の時間におけるものであり、唯一に決まる。このとき、文脈集合を「視点がPというgoalを持つか否か」に基づいて2つの空でない集合に分けることはできない。しかし、助詞ハが使用されているのであれば、ハの持つ文脈制限の意味は空虚でないものとして働いていると語用論上想定される。結果として、一回的な事態を述べる場合にはタメニハの使用がブロックされると考えられる。

- ✓ タメニ以外の従属節にハが後接された場合も一回の出来事を描写しにくくなる(塩入 1992)ことについても、同様の分析が可能と予測される。

4.4. 原因用法の不在

最後に、原因用法の不在について論じる(→上記の問題点(13c))。説明の基本的な流れは、前節と同様である。原因のタメニはその意味上、現実世界の事態の因果関係について述べるものであり、また、目的の場合とは異なり主体や時間ごとに異なる因果関係が存在するとは通常想定できない。一時的に因果関係の認定に関する認識の相違が生じたとしても、最終的にはどちらかが正しいものとされ、因果関係は1つに決められる。よって、仮に原因用法としてタメニ+ハを解釈しようとしても、文脈集合に含まれる視点を「Pタメニ」によって空でない2つの集合に分けることはできず、やはりハの付与が意味論的に空虚なものになってしまう。このため、タメニハは原因用法をもつことができないと分析することができる。

- ✓ ただし、原因・理由を表すカラについては、興味深い現象がみられる。「旅行をするからには、海外が良い。」のようなカラニハという形式が使用可能であり、しかもカラとは置き換え不可能なのである。本発表の提案を発展させるならば、ハが後接されることによって、カラニハは視点ごとに真偽が異なり得るような特殊な「原因」を述べる表現になっていると分析できる可能性がある。

5. まとめ

本発表では、目的／原因用法をもつタメニに助詞ハが後接された場合の用法の分布や使用条件について、タメニとハの意味論を構成的に組み合わせることで説明が可能だと論じた。具体的には、タメニハに関する以下の3つの点について説明を与えた。

説明すべき点

- (13) a. 助詞ハの付与がどのように「複数性」の要求をもたらすのか。
- b. 上記(A)-(D)の条件の共通点と相違点をどのようにして捉えることが出来るか。
- c. タメニハが原因用法をもたないのはなぜか。

5.1. 今後の課題

本発表で扱った現象や分析に関連が深いものとして、以下のような現象の分析を行うことを今後の課題としたい。

- 目的用法のタメニ(ハ)の動作主制限について：タメニ／タメニハ節には、動作主の制約について違いがある。このような現象についても、視点をういた本発表の分析によって説明可能と考えられる。

(18) a. 成績が良くなる {*ために／ように} 塾へ行くことにした。

b. 成績が良くなるためには塾へ行く必要がある。

(塩入 1995: p.465)

- とりたて助詞の後接について：ハ以外にも、ダケやサエといったとりたて助詞をタメニに後接させることが可能であり、その場合にも原因用法がなくなる、目的用法に制限が生じるなど、タメニハについて取り上げたのと同様の現象がみられる。本発表の分析はハの意味論の特殊性に依存する部分が多かったため、とりたて詞についてはさらに検討する必要がある。

(19) 病人をいやすためではなく、病人が死に向かっていくのを見届ける {ためにだけ／タメダケニ／*タメダケ} ある。
〈○目的〉(塩入 1995a: p.462 (6))

(20) a. 社外に委託したために情報が漏れてしまった。〈原因〉

b. 社外に委託したためにも情報が漏れてしまった。〈×原因〉

c. 社外に委託したため{だけに／にだけ}情報が漏れてしまった。〈×原因〉

参考文献

Hara, Yurie (2018) Topics are conditionals. In *Proceedings of WAFL 13*. MITWPL.

Heim, Irene (1982) The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases, Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Lasnik, Peter (2009) Relative truth, speaker commitment, and control of implicit arguments, *Synthese*, 166, 359-374.

Lasnik, Peter (2013) Subjectivity and Perspective in Truth-Conditional Semantics, Oxford University Press.

Lewis, David (1978) Attitudes de dicto and de se, *The Philosophical Review*, 88(4), 513-543.

Portner, Paul (2009) *Modality*. Oxford University Press.

塩入すみ(1992)「「X ハ」型従属節について」『阪大日本語研究』4, pp.59-71.

塩入すみ(1995)「スルタメニとスルタメニハー目的を表す従属節の主題化形式と非主題化形式」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版, pp.460-467.

Stalnaker, Robert (1978) Assertion, In: P. Cole (ed.) *Pragmatics*, Academic Press, 315-332. [Portner, P. and B. Partee (eds.) *Formal Semantics*, Blackwell に再録]

Stephenson, Tamina C. (2007) *Towards a Theory of Subjective Meaning*. Ph.D. thesis, MIT.

田村早苗 (2012)「認識視点と因果：日本語理由・目的表現の研究」京都大学博士論文

田村早苗 (2013)『認識視点と因果—日本語理由表現と時制の研究』くろしお出版.

田村早苗(2017)「従属節の用法と主題/とりたて助詞の付加：判断主を含む形式意味論による分析」『北星学園大学文学部北星論集』55(2), pp.53-63.